

ダニエル書 - 第百五十九番

ダニエルの幻における御使いによる三度の接触を解き明かす：預言的な啓示

Jeff Pippenger

2024-03-26

第十章において、ダニエルは三度触れられるが、その三度の接触は、ダニエル自身が「マレー」、すなわち幻を三度経験することに対応している。最初と最後の出現は、イエス・キリストの黙示の使者であるガブリエルによるものであった。ガブリエルは、父からキリストに与えられたそのメッセージをキリストから受け取り、それを預言者に伝える者であり、その預言者はそれを諸教会に送るのである。

しかし、わたしは真理の書に記されていることをあなたに示そう。これらの事において、わたしと共に立っている者は、あなたがたの君ミカエルのほかにはいない。ダニエル書 10:21

ガブリエルは自分が被造物であることを知っており、そのため、ヨハネの黙示録でヨハネに自分を礼拝してはならないとはっきり告げた。

私は彼を拝もうとして、その足もとにひれ伏した。すると彼は私に言った。「そんなことをしてはならない。私はあなたや、イエスの証しを持つあなたの兄弟たちと同じしもべである。神を礼拝しなさい。イエスの証しは預言の霊なのだから。」ヨハネの黙示録 19章10節

ゆえに預言を学ぶ者は、ガブリエルが「真理の書に記されたこと」に関連して、自分の上にいる者は誰もいないと述べるその理由には、特定の預言的目的があるのだと理解すべきである。彼が、自分よりも聖書をよく理解しているのはキリストただ一人だと明言するとき、彼はキリストを「あなたの君ミカエル」として指し示している。しかしミカエルは単なる君ではなく、大天使である。

しかし大天使ミカエルは、悪魔と争い、モーセの遺体のことで論じ合ったときにも、彼をののしる言葉で訴えることはあえてせず、「主があなたを戒められるように」と言った。ユダ 7節。

したがって、三度の接触はいずれも天使によるものであり、ダニエルが「mareh」という幻を経験した三度とも、それは天使によるものである。三度目にダニエルが触れられたのは彼を力づけるため、先の二度目の接触で彼は力を失っていたからである。

すると、再び、人の姿のような者が来て、わたしに触れ、わたしを強めた。そして言った、「大いに愛されている人よ、恐れるな。平安あれ。強くあれ、まことに強くあれ。」彼がわたしに語ったとき、わたしは力づけられ、「わが主よ、語ってください。あなたはわたしを強められたからです」と言った。すると彼は言った、「あなたは、なぜわたしがあなたのもとに来たのかを知っているか。今、わたしはペルシャの君と戦うために帰って行く。わたしが去って行くとき、見よ、ギリシャの君が来る。」ダニエ

ル書 10:18-20.

ガブリエルは、ダニエルに「われ汝のもとに来たるゆえんを知るや」と尋ねたとき、自分が「終りの日に汝の民に臨むべきことを汝に悟らせんために来た」ことをダニエルに思い起こさせる。終りの日について彼がダニエルに教えたことと一致して、ガブリエルはさらに、自分が「帰ってペルシャの君と戦わん。わたしが出て行くと、見よ、ギリシヤの君が来る」と述べる。こうして彼は、第十一章の預言的叙述を開始するのであり、それは終りの日に十四万四千人に起こることを描写している。その預言的叙述は、「ペルシャの君」および「ギリシヤの君」との戦いという文脈の中に置かれている。

キュロス大王とアレクサンドロス大王のあいだの実際の歴史的な隔たりは二百年以上あった。しかし、ヨハネの黙示録第十一章の大地震では、最終的な動きは急速で、偽りの北の王が第六の王国を征服するとすぐに、ギリシヤに代表される第七の王国、すなわち十人の王たちは、ただちに自分たちの王国を獣に与えることに同意する。

一つの水準において、「マレ (mareh)」の幻はダニエル書第十章において七回用いられている。私たちはその七回のうち四回を考察し、第一の言及は、クロスの第三年より前に、ダニエルがその幻を理解していたことをダニエル自身が明らかにしている箇所であることを確認した。続く三つの言及においては、それぞれの幻における三度の接触が、二十一日の嘆きから目覚めるダニエルの経験を示している。彼のこのリバイバルとしての覚醒は、永遠の福音の三段階の過程の上に構成されており、その三つの段階は御使いたちによって表されている。ただし、第二段階は大天使ミカエルであり、彼こそモーセを死からよみがえらせ、彼を天へ移したお方である。

第十章において「幻」という語が置かれている他の三箇所では、それは「mareh」ではなく、「marah」である。「marah」は「mareh」の女性形である。それは幻を意味し、さらに使役的には「鏡」または「見鏡」を意味する。その定義の鍵は、それが「使役的」であるという点にある。それは「その現れ」の幻ではあるが、その性が異なっているため、異なる預言的メッセージを示している。その定義において「鏡」が示唆するのは、幻を見る者たちが、何らかの反映を見るということである。これが、その語における「使役的」要素である。「marah」という文脈における使役語の定義は、実に深遠である。

「使役」という語は、因果関係、すなわち何かを起こさせるという行為の概念に関わる。言語学、特に動詞の形態論において、使役は、動詞の主語が別の人や物にその動詞が表す行為を行わせることを示す文法形式である。例えば英語では、動詞 “to read” は “to make someone read” と言うと使役になる。この場合、主語は別の人に読ませている。

使役形は、主語が動詞で表される行為を引き起こす当事者であることを示す。「使役」とは、行為や出来事がどのように生じさせられるかというあり方を指す。ダニエルがヘブライ語の「marah」を用いる三回では、注視されるその幻が、見る者を、自分が見ている像と同じ姿へと変化させる。

第一の月の二十四日、私は大河、すなわちヒデケルのほとりにいた。そのとき私は目を上げて見ると、亜麻布を着て、腰にウファズの純金の帯を締めた一人の人がいた。その体はベリルのように、顔は稲妻のような有様 (mareh)、目は火のともしびのよ

うで、腕と足は磨かれた青銅のように輝き、その言葉の声は群衆の声のようであった。私ダニエルだけがその幻（marah）を見た。私と共にいた人々はその幻（marah）を見なかったが、大いなる震えが彼らに臨み、彼らは身を隠そうとして逃げ去った。こうして私はひとり残され、この大いなる幻（marah）を見たが、私のうちには力が残らなかった。私の容貌は私のうちで変わって損なわれ、私は力を保てなかった。しかし私はその言葉の声を聞いた。そしてその言葉の声を聞いたとき、私は地に顔を向け、うつ伏して深い眠りに落ちた。ダニエル書 10:4-9

二十一日の喪の終わりに、その最後の数日は、二人の証人が通りで死んでいる三日半と一致するが、ダニエルは突如キリストの御姿を見せられ、その御姿は「稲妻の姿（mareh）のようであった」。黙示録第十一章の三日半の終わりにあるその出来事は分離をもたらす。というのも、「ダニエルと一緒にいた」人々は「その幻（marah）を〔見〕なかった。むしろ大いなる震えが彼らに臨み、彼らは逃げて身を隠した。ゆえに」ダニエルは「ひとり残された」が、「私と一緒にいた人々は、その幻（marah）を〔見〕なかった。むしろ大いなる震えが彼らに臨み、彼らは逃げて身を隠した」。

ダニエルがひとりでいたときに見た幻は、ダニエルをその幻の姿に変容させた、女性形で使役的な幻であった。変容は、ダニエルの人間的な力が取り去られ、彼の容姿の美しさが腐敗へと変えられることによって成し遂げられた。

魂が宿り、それを通して働くこの肉体そのものは主のものです。私たちには、この生体のいかなる部分もおろそかにする権利はありません。生体のすべての部分は主のものです。私たち自身の身体の仕組みに関する知識は、すべての肢体が義の器として神に仕えるべきであることを教えるはずで

人の心の高慢を抑えることができるのは、神おひとりだけである。私たちは自分で自分を救うことはできない。私たちは自らを新生させることもできない。天の宮廷では、次のような歌が歌われることは決してない。「自分を愛し、自分を洗い清め、自分を贖った私に、栄光と誉れ、祝福と賛美あれ。」しかし、これこそが、この世で多くの人が歌う歌の主旋律となっている。彼らは、心において柔和でへりくだるとはどういうことかを知らず、できることなら、それを知らうともしない。福音のすべては、キリストに学び、その柔和とへりくだりを学ぶことのうちにある。

「信仰による義認とは何か。神が人間の栄光を塵に伏させ、人間自身の力では成し得ないことをその人のために行う神のわざである。」『牧師たちへの証言』456頁。

信仰による義認の経験は、人間の栄光を塵に伏させる神の御業である。ダニエルと共にいた人々が逃げ去らざるを得なくなったその幻は、キリストの顕現に関する「使役的」な女性形の幻であり、ダニエルの自己義が塵に伏せられた直後に、天使が三度彼に触れ、最終的にダニエルはそのメッセージを担う力を与えられた。

1888年、ジョーンズとワグナーの両長老によって示されたとおりの「信仰による義認」のメッセージを携え、力ある御使いが降りてきた。まさにその同じ御使いが、2001年9月1日に、同じ「信仰による義認」のメッセージを携えて再び降りてきた。それが、十四万四千人の封印の始まりを告げた。十四万四千人の封印の終わりには、初めのときのメッセージが繰り返される。というのも、イエスは常に、物事の終わりをその初めによって示さ

れるからである。

1840年8月11日、その同じ天使が降りてきて、1840年から1844年にかけて成就した三段階を開始した。その三段階は、1840年8月11日の第一の天使の力づけに始まり、1844年4月19日の第二の天使の到来、そして1844年10月22日の第三の天使の到来へと続いた。その歴史は、2001年9月11日に三天使の第一が降りることを予表しており、それに続いて2020年7月18日の失望において第二の天使が到来し、間もなく来る日曜法における第三の天使の到来で完結する。

その歴史の終わりに、黙示録第十一章に表されているように、またダニエルの二十一日間の哀悼によっても表されているように、通りでの死の三日半の後にモーセとエリヤを復活させるためにミカエルが降りて来る時、キリストも再び降臨される。キリストはまず、ご自身の栄光の幻、すなわち人の栄光を塵に伏させ、分離を生み出す幻を示される。ダニエルが塵に伏し、「原因的」な女性的な幻を見つめることによって変えられた後、彼はガブリエルに初めて触れられ、震える足で立たせられる。

それから大天使ミカエルが「モーセを復活させる」ために降りて来て、ダニエルに二度目に触れると、彼は実際に自分が主と語っているという現実には圧倒され、力を失った。続いてガブリエルが来て三度目に彼に触れ、間もなく到来する日曜法において旗印となる務めのために彼を強めた。これら三度の接触は、一日のうちに起こっているとはいえ、黙示録14章の三天使の象徴である。

第一の天使の経験には、稲妻のようなキリストの出現、分離をもたらす「原因的」な幻、そして人間的な栄光の塵からダニエルを起こす第一の触れが含まれている。第一の天使は第一のメッセージを表しているのだから、そこに含まれる三つの段階すべてを備えている。第一の触れが9節から11節に記されているのは偶然ではない。

しかし、私はなおも彼の語る声を聞いた。その声を聞いたとき、私は顔を地に伏せたまま深い眠りに落ちた。すると、見よ、一つの手が私に触れ、私をひざと両手のひらをつく姿勢に起こした。彼は私に言った、「大いに愛されている人、ダニエルよ、私があなたに語る言葉を悟り、まっすぐに立ちなさい。今、私はあなたのもとに遣わされたのだから。」彼がこの言葉を私に告げ終えたとき、私は震えながら立ち上がった。
ダニエル書 10:9-11。

キリストご自身が施した第二の触れの体験は、ダニエルを、話すことができない状態から、主と語る状態へと変えた。第二の触れにおいて、ダニエルには息がなく、ここでは彼は、エゼキエル書三十七章における最初のメッセージの段階にある者として描かれている。

彼がこのような言葉を私に語ったとき、私は地に向かって顔を伏せ、口がきけなくなった。すると見よ、人の子らに似た者のひとりが私の唇に触れた。そこで私は口を開いて語り、私の前に立っている者に言った。「ああ、わが主よ、その幻のゆえに私の苦悩は私に臨み、力がまったく残っておりません。どうしてこの私の主のしもべが、この私の主と語る事ができましようか。私はたちまち力を失い、息も残っていないのです。」ダニエル書 10:15-17

エゼキエルの第二のメッセージにおいて、四方の風からのメッセージが骨に吹きかけられ、骨が生きて強大な軍勢として立ち上がる。その軍勢が力を得ることは、三度目の接触によって表されている。

そのとき、再び、人の姿のような者が来て私に触れ、私を力づけた。彼は言った。「大いに愛されている人よ、恐れるな。あなたに平安があるように、強くあれ、そう、強くあれ。」彼が私に語り終えると、私は力づけられて言った。「どうぞ、わが主よ、お話しください。あなたが私を力づけてくださったからです。」彼は言った。「なぜ私があるあなたのところに来たのか、知っているか。今、私はペルシアの君と戦うために戻って行く。私が去って行くと、見よ、ギリシャの君が来る。しかし、私は真理の書に記されたことをあなたに示そう。このことにおいて私を助け、私と共に立つ者は、あなたがたの君ミカエルのほかにはいない。」「また、メディア人ダリオスの第一年には、私自身が彼を支え、強めるために立っていた。今、私はあなたに真実を示そう。見よ、なおペルシアには三人の王が起こる。その後、第四の者が彼らすべてよりはるかに富む者となり、その富による力によって、彼は皆をギリシャの王国に敵対して奮い立たせる。」ダニエル 10:18-11:2.

エゼキエル書第三十七章において二人の証人を生かすものとするメッセージは、第三の災いのイスラムのメッセージである。しかし、「行に行を加え、教えに教えを加え」て言えば、ガブリエルが、ミカエルがモーセを起し、旗印として天に引き上げる挿図の中で示しているメッセージは、合衆国の最後の大統領のメッセージである。それは、真のプロテスタントの角がそうであったように、2020年に殺された第六の大統領（共和党の角）のメッセージである。ダニエルの叙述においては、真のプロテスタントの角のための嘆きの日々からの復活が、共和党の角の復活の特定へと導いた。

ダニエル書第十章において、「幻」あるいは「現れ」という語が七回用いられている。これら七つの言及は、同一のヘブライ語によって示されているが、そのうち三回はその語が女性形であり、他の四回は男性形であるという点を除いて同じである。七は完全数であり、七を成す三と四の組合せは黙示録の主要な特徴であって、そこでは七つの教会のうち最後の三つ、七つの封印のうち最後の三つ、さらに七つのラッパのうち最後の三つが、最初の四つから特に区別されている。

ダニエル書とヨハネの黙示録は同じ書物であり、この意味ではダニエルとヨハネは同じ終わりの日の象徴である。第十章のキリストの幻は、黙示録第一章のキリストの幻である。

黙示録第1章で、ヨハネは背後から声を聞き、語っている方を見ようと振り向く。

私は主の日に御霊にあつて、背後からラッパのような大きな声を聞いた。こう言った。「わたしはアルファでありオメガである。最初であり最後である。あなたが見ていることを書物に記し、アジアにある七つの教会に送りなさい。すなわち、エペソ、スミルナ、ペルガモ、テアテラ、サルディス、フィラデルフィア、ラオデキアへ。」ヨハネの黙示録 1:10、11.

それがダニエル書第十章における三度の接触であれ、黙示録第一章における同じ幻であれ、あるいはエゼキエル書第三十七章における二つの使命であれ、またイザヤが祭壇の

上から取られた燃える炭で触れられたことであれ、その経験が示しているのは、最後の警告の使命に力が与えられることであり、その使命は二人の証人の復活する二〇二三年七月に始まる。ダニエル、ヨハネ、エゼキエル、そしてイザヤは皆、自分のうしろから「古い道」による「声」を聞き、「だれを遣わそうか」と問われる使者を表している。その使者が「ここにおります。わたしを遣わしてください」と応答するとき、彼は強められ、荒野で叫ぶ者のように、その声を上げる。「耳のある者は、御霊が諸教会に言われることを聞くがよい。」

次の記事でこの研究を続けます。

先に述べたその折に、天使ガブリエルは、当時彼が受け取ることできたすべての教えをダニエルに授けた。しかしその数年後、預言者はなお十分に解き明かされていない事柄についてさらに知ることを望み、再び神からの光と知恵を求めることに専心した。「そのころ、私ダニエルは三週間の間、喪に服していた。私は美味しい食べ物を口にせず、肉もぶどう酒も口にしなかった。身に油を塗ることも全くしなかった……。それから私は目を上げて見ると、亜麻布をまとい、腰にウファズの純金の帯を締め一人の人がいた。その体はベリルのようで、顔は稲光のよう、目は燃える松明のようであり、腕と足は磨き上げられた青銅のように輝き、その語る声は群衆の声のようであった」（ダニエル書10:2-6）。

この記述は、ヨハネがパトモス島でキリストの啓示を受けたときに記したものとよく似ている。神の御子ご自身がダニエルに現れた。私たちの主は、もう一人の天の御使いを伴って、終わりの日に何が起こるのかをダニエルに教えるために来られる。

世界の贖い主によって明らかにされた偉大な真理は、隠された宝を求めるように真理を探し求める者たちのためのものである。ダニエルは老齢の人であった。彼の生涯は異教の宮廷の魅惑のただ中で過ぎ、彼の心は大帝国の政務に煩わされていた。それでも彼はそれらすべてから身を退け、神の御前で自らの魂を苦しめ、いと高き方の御旨の知識を求めた。そして彼の嘆願に応じて、終わりの日々に生きる者たちのために、天の宮廷からの光が与えられた。それゆえ、天から私たちにもたらされた真理を悟ることができるように私たちの理解を開いてくださるため、私たちはどれほどの熱心さをもって神を求めるべきであろうか。

「私、ダニエルだけがその幻を見た。私と共にいた者たちはその幻を見なかったが、彼らには大いなる戦慄が襲い、逃げて身を隠した。……私は力を失い、顔色は変わって青ざめ、全く力が残らなかった」（7、8節）。真に聖化された者は皆、同様の経験をします。キリストの偉大さ、栄光、完全さをより明確に見るほど、自分の弱さと不完全さをいっそう鮮明に見るようになる。彼らは自分が罪のない者だと主張しようとはしない。自分では正しく美しいと思えていたものも、キリストの清さと栄光と対比すれば、取るに足らず朽ちやすいものにしか見えない。人が神から離れ、キリストについての見方がきわめて曖昧なときにこそ、「私は罪がない。私は聖化されている」と言うのである。

そのときガブリエルが預言者に現れ、こう語りかけた。「ああ、大いに愛されている人ダニエルよ、私があなたに語る言葉を悟り、まっすぐ立ちなさい。いま私はあなたのもとに遣わされているのだ。」彼がこの言葉を私に語ったとき、私は震えながら立

ち上がった。すると彼は私に言った。「恐れるな、ダニエルよ。あなたが悟ろうと心を定め、あなたの神の前にへりくだった最初の日から、あなたの言葉は聞かれ、私はそのあなたの言葉のために来たのだ。」（11節、12節）

なんと大いなる栄誉が、天の威厳の主によってダニエルに示されたことだろう！
その方は震えるしもべを慰め、彼の祈りが天で聞かれたことを確かに告げられた。その切なる嘆願への答えとして、ペルシャの王の心に働きかけるために、天使ガブリエルが遣わされた。ダニエルが三週間断食して祈っている間、王は神の御霊の感化に逆らい続けていたが、天の君、すなわち大天使ミカエルが遣わされ、かたくなな王の心を翻させ、ダニエルの祈りに応えるべく決然たる行動を取らせた。

「そして彼がそのような言葉を私に語ったとき、私は顔を地に向け、口がきけなくなりました。見よ、人の子らの姿に似た者が私の唇に触れ……そして言った、『大いに愛された人よ、恐れるな。平安あれ。強くあれ、そう、強くあれ。』彼が私に語ったとき、私は力づけられ、『わが主よ、お語りください。あなたが私を力づけられたからです』と言った」（15-19節）。ダニエルに現された神の栄光はあまりにも大いなるもので、彼はその光景に耐えられなかった。そこで天からの使者はその臨在の輝きを覆い、預言者の前に「人の子らの姿に似た者」（16節）として現れた。彼は神の力によって、この誠実と信仰の人を強め、神から彼に送られた言葉を聞けるようにした。

ダニエルは、いと高き方に仕える献身的なしもべであった。彼の長い生涯は、主に仕える気高い奉仕のわざで満ちていた。彼の品性の清さと揺るぎない忠誠に匹敵しうるものがあるとすれば、それはただ、彼の心の謙遜と神の御前での悔い砕かれた心だけである。重ねて言うが、ダニエルの生涯は、真の聖化の靈感を受けた例証である。『聖化された生涯』49-52頁。